

杜甫詩の「花」と「鳥」：「春望」私考

竹村，則行
九州大学：名誉教授

<https://doi.org/10.15017/7183026>

出版情報：中国文学論集. 52, pp.1-18, 2023-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



杜甫詩の「花」と「鳥」

——「春望」私考——

竹村 則行

一 はじめに — 杜甫の「春望」詩と「憶弟二首其二」詩 —

周知の名句「国破れて山河在り」で始まる杜甫「春望」詩の諸解釈については、『校注唐詩解釈辞典』^①に手際よく纏められている。近年では後藤秋正『「春望」の系譜』所収「杜甫『春望』の領聯について」^②が関連資料をくまなく整理検討する。管見に入った論著は一部に過ぎないが、先達の研究に感謝したい。その上で、筆者は「春望」詩に用いられる「花・鳥」の表象について素朴な疑問が湧いたが、筆者の調査不足もあり、従来参考書には納得できる明白な説明を見つけられなかった。

小稿は、杜甫「春望」詩における「花」「鳥」の表象について、数多い先行研究調査や確たる証拠も不十分なままに、筆者が想像に任せて自問自答を試みた仮答案である。赤恥を覚悟の上で、私考の大意を予め述べれば、

従来解釈は概ね「春望」詩を単独詩篇として捉え、杜甫の他詩と関連した考察が乏しいと思われる。これに對し、小稿は「春望」詩について、安祿山の乱後に洛陽・長安を脱出して天下を流浪した杜甫の、青年時の一族団欒の歡樂の記憶や過酷な家族別離と天下流浪の現実、更には強烈な望郷と帰郷の悲願等が凝縮した「憶弟二首其二」等の関連する作品群の一環として捉え直したい。即ち「春望」詩の「花」「鳥」には、過酷な現実描写の裏に、立証資料は乏しいものの、「憶弟二首其二」詩等、曾て洛陽の陸渾莊に於いて楊氏と賑々しく華燭の典を挙げた三十歳の杜甫の歡樂の青春の記憶が色濃く投影されていると考える。故に「春望」詩の解釈に当たつ

杜甫詩の「花」と「鳥」

ては、これらの関連詩に描かれた背景を併せ考慮して総合的に解釈することが望ましい。

具体的には、筆者は「春望」詩（〇一四八）⁽³⁾の「感時花濺淚 恨別鳥驚心」句について、その二年後に詠まれ、複数の詩語が共通する「憶弟二首其二」詩（〇二四九）の「故園花自發 春日鳥還飛」句との関連について比較分析し、更に杜甫詩における「別れ」「故園」「帰郷」等の関連詩語も踏まえ、「春望」詩の再検討を試みた。その結果、作詩時期は「春望」が二年早いものの、「春望」に描かれた「花」と「鳥」の形象は、杜甫が戦乱で消息不明となった実弟杜穎を思つて詠んだ「憶弟二首其二」に描かれたそれと同様の対象を描写すると判断するに至った。

「春望」詩については中国を含めて無数の先行研究や訳注があるが、このような観点から明確に分析した論文等は管見に入らない。多く見るのは「平時ならば楽しいはずの花や鳥が、戦時の今は悲しみの象徴として」とする、宋・司馬光説に沿った解釈（後述）だが、筆者はこの方向の解釈に馴染めない。無論「平時の花や鳥は歡樂の対象であるが、戦時のそれは悲涙慨嘆の対象である」という解釈は納得できるが、このような平穩な解釈では杜甫の辛苦が読者に直に伝わらない。後述するように、「春望」の「花・鳥」には当時戦乱で家族との別離を余儀なくされた杜甫の望郷と帰郷、別離と再会の思念が強く込められている方向で解釈した方が、就職の失敗と家族の離散、杜家の復興と天下放浪に苦悩する「家長」杜甫の心情により肉薄するのではないだろうか。そこで「七十にして心の欲する所に従い」、専門家ならぬ一愛読者として本稿を起草し、日中の杜甫詩研究の先達に供することにした。

まず、両詩を巡る種々の問題を整理しておきたい。詩題の「春望」は草木生い茂る長安の晩春の眺望の意であり、詩中に花と鳥に触発された杜甫の心情を詠み込む。「花」「鳥」は、この詩を見る限り長安の春景を彩る点景であるが、杜甫の関心は眼前の春景を時間的空間的に突き抜け、曾て三十歳（二説）の春、洛陽の陸渾荘において自身の婚姻が挙行され、一族が楽しく団欒した記憶と、その後の戦乱で家族が離散し、消息不明となった悲痛の現実に向けられていたと推察する。第四句の「恨別」がこの詩の眼目である。次に「春望」詩に続いて確認事項を検討する。

國破山河在 城春草木深

国破れて山河在り 城春にして草木深し

感時花濺淚 恨別鳥驚心

時に感じては花にも涙を濺ぎ 別れを恨んでは鳥にも心を驚かす

烽火連三月 家書抵萬金

烽火 三月に連なり 家書 万金に抵たる

白頭搔更短

渾欲不勝簪

白頭

搔けば更に短く 渾べて簪に勝へざらんと欲す

①作詩年は至徳二載（七五七）晚春三月、杜甫四十六歳。場所は長安、時に安祿山乱の渦中、杜甫は賊軍に捉えられて長安に拘束されていた。幸い拘束は緩く、後に杜甫は脱出に成功する。

②杜甫は家族を事前に長安の北約百五十kmにある鄜州に疎開させていた。戦乱（烽火）のために、杜甫と家族は当時別離を余儀なくされていた。

③「家書」は家人（楊夫人）からの書簡をいう。弘農華陰の名族楊氏の出身である楊夫人は、遠距離の夫に手紙を認める教養があった。杜甫には別に「得家書」詩（同年七五七年作。〇一七〇）がある。「月夜」（七五六年作。〇一四二）・「江村」（七六〇年作。〇四〇二）・「一百五日夜对月」（〇一五二）・「憶幼子」（〇一五二）・「遣興」（〇一五三）等の諸詩に、楊夫人や子供の姿を愛情深く描く。周知のように、杜甫の死後、次男杜宗武の子（杜甫の孫）杜嗣業から墓誌銘の撰文依頼を受けた元稹に「唐故工部員外郎杜君墓係銘」があり、中に「夫人は弘農楊氏の女、父は司農少卿楊怡、四十九年にして終わる。」とある（一説に、楊夫人は大暦二年（七六七）、夔州（四川）で没した）。終句「白髪が簪も挿せないほど短くなった」という「人を驚かす」表現は、表面上は困難な時勢が杜甫の頭髪に与えたダメージを述べるが、それでは描写が陳腐で杜甫らしくない。筆者は、この二句は杜甫が一族再興の夢を託した任官（髪に簪を挿す）の失敗談を底意に含む自虐表現と解する。国家の繁栄に貢献し、杜家の復興を目指す杜甫の熱意は伝存する杜甫詩文の到る所に見られるが、科挙受験に失敗し、合格による正規の出世ルートに乗れなかった杜甫がやむなく就いたのは、現地有力者の推薦による臨時職が主であった。しかしそれでさえ、プライドが高い杜甫は屢々辞退する。「春望」の表現についても、安祿山乱の渦中において、杜甫の就職活動は思わしくなく、まだ高齢でもない四十六歳の杜甫が近年頓に薄くなった白髪を搔きつつ、「これじゃわしは役人になっても簪も挿せないわい。」と嘯く様子が眼に浮かぶ。杜甫の白髪短髪が急に増えたのは無論逼迫した時局によるものもあるが、直接には任官（就職）の失敗にあると筆者は察する（杜甫は直後の五月、鳳翔に蒙塵した肅宗の下で暗れて左拾遺に任官した。果たして簪は短小になった白髪に無事挿せたのだろうか）。

続いて「憶弟二首其二」（〇二四九）詩について、前「春望」詩に準じて要点を整理しておきたい。

且喜河南定 不問鄴城圍 且つ喜ぶ 河南定まれるを 鄴城の囲まるるは問はず

百戰今誰在 三年望汝歸 百戰 今は誰か^か在る 三年 汝の帰るを望むなり

故園花自發 春日鳥還飛 故園 花は自ら^{おのずか}発き 春日 鳥は還^なほ飛ぶ

斷絶人煙久 東西消息稀 人煙 断絶して久しく 東西 消息稀なり

①この詩は乾元二年（七五九）、即ち「春望」より二年後、杜甫四十八歳の春、洛陽の別荘陸渾荘に於いて詠んだ。原注に「時に歸りて河南の陸渾荘に在り」とある。陸渾荘は十八年前、天下「壯遊」（〇九五）を終えた三十歳の杜甫が「三十にして立ち」、楊氏との婚姻を機に新築した杜家一族の団欒の拠点であった（「土室」（〇〇三三）「土裏旧荘」（一二〇五）と記する所から、新居の陸渾荘は当地に多い窟洞であったと思われる）。間もなく杜甫が生涯不帰の旅に出ることを考えれば、杜甫は旅立ちの直前、洛陽居住の関係で当時既に無人となっていた思い出深い別荘陸渾荘に別れを告げに来たものと推察する。

②「弟」は当時山東臨邑県の主簿の任にあった杜穎である。彼は杜甫の四弟の中で最も杜甫に年齢が近いすぐ下の弟である。「安史の乱によつて兄弟が離散するまで、兄弟たちは杜甫の家郷である洛陽東郊の偃師の莊園（陸渾荘）を本拠に暮らしていた」^⑨。「断絶人煙久」（『「人煙断絶久」』とあるので、陸渾荘は杜甫の洛陽転居と共に間もなく無人となったと思われる。洛陽に居住する杜甫は、乾元二年（七五九）、父祖の地たる洛陽を後にして、不帰の旅に出る直前に陸渾荘を訪問している。「三年」は、安祿山乱の混乱で実弟杜穎が消息不明になって以後をいう。杜穎は後に山東へ避難したことが判明した。「故園」は陸渾荘を指す。杜甫が山東の杜穎に対して、「我々杜一家の懐かしい陸渾荘は今も変わらず春には美しい花が咲き、空には春の鳥が飛んでいるよ（早く一族が再会して昔のように団欒したいものだ）」と呼びかける構図である。「東西」は山東の杜穎、洛陽の杜甫を指す。今から十八年前、三十歳の杜甫は一族の期待を一身に背負つて名族弘農出身の楊氏と華燭の典を挙げ、洛陽東郊に別荘を新築した。この詩の後半は、曾て陸渾荘において、一族挙げて賑賑しく祝宴を挙げたことを回想する。この聯の大意「懐かしい故郷の陸渾荘は昔と変わらず春には花が咲き、空には鳥が飛んでいるが、今は住む人もなく、炊煙は久しく上がらず、山東の弟からの便りも無い」。この詩に於いて杜甫は、消息が絶えて三年になるす

ぐ下の弟杜穎の早期の帰郷と再会を渴望する。

③家長たる杜甫の親族への思いは篤く、安祿山乱によって別離を余儀なくされた親族（特に穎・観・豊の三人の弟。末弟の杜占は杜甫に同行した）の安否を案じる詩を数多く残す。七五九年、杜甫が洛陽で親族に別れを告げ（「恨別」○四二〇。第五章参照）、陝西・甘粛・四川・湖北・湖南の各地を流浪しつつ、故郷の長安・洛陽での歡樂の青春の日々を回想する心情と、内乱で別離した親族と早く再会したいと願う心情は表裏一体である。

④「春望」は七五七年晩春の長安において、また「憶弟二首其二」は二年後の七五九年初春に洛陽において詠まれた。この間、長安・洛陽の平和が賊軍に攪乱された事と、家族親族との別離という苦難に遭遇した杜甫が洛陽を後にして帰らぬ旅に出た事とは連続する一連の事態である（後述第四・六章）。両篇とも杜甫は、親族（妻子・舍弟）と別離状態であった（四弟の杜占は杜甫に随行）。以上から、筆者はこれらの資料を総合して、「春望」の解釈においては、「憶弟二首其二」詩、及びその他関連記述の内容を斟酌する事は有効且つ重要であると認識する。

二 司馬光「温公詩話」について

「春望」詩の「花」「鳥」の解釈について、北宋の碩儒司馬光（一〇一〇—一〇八六）「温公詩話」の影響は大きい。森槐南『杜詩講義』上巻は次のように述べる。

此の春望の詩は是はまあ非常に有名なるものでございまして杜詩の例を挙げて申し上げます場合には第一に指を屈せられます詩でございまして、尤も之を重にも唱道致しましたのは欧陽永叔の六一詩話、又続いて司馬温公の続詩話、此様な人が当時の事を申します場合に必ず之を引きまして：

以下「温公詩話」から該当部分を引用してその内容を検討する。

古人為詩、貴於意在言外、使人思而得之。故言之者無罪、聞之者足以戒也。近世詩人唯杜子美最得詩人之體。如「國破山河在、城春草木深。感時花濺淚、恨別鳥驚心」、「山河在」明無餘物矣、「草木深」明無人矣。花鳥平時可娛之物、見之而泣、聞之而悲、則時可知矣。（後略）（古人詩を為るは、意の言外に在り、人をして思ひて之を得しむるを

杜甫詩の「花」と「鳥」

貴ぶ。故に之を言ふ者は罪無く、之を聞く者は以て戒むに足るなり。近世の詩人は唯だ杜子美（甫）のみ最も詩人の体を得たり。「国破れて山河在り、城春にして草木深し。時に感じては花にも涙を濺ぎ、別れを恨んでは鳥にも心を驚かす」の如き、「山河在り」は余物無きを明らかにし、「草木深し」は人無きを明らかにす。花鳥は平時は嬉しむべき物なれど、之を見て泣き、之を聞きて悲しむは、則ち時を知るべきなり。（後略）

ここで司馬光は、「詩作には言外の意を讀者に考えさせることが大事だ」として、杜甫の「春望」詩を挙げ、「国破山河在」は余計な表現が無く、「城春草木深」は人為の跡が無い。花や鳥は平時は見たり聞いたりして楽しむ物だが、（詩中で作者が）花を見て涙を流し、鳥の声を聞いて悲しむのは、（讀者はそこに安祿山乱の渦中という）時勢を読み取るべきである」と述べる。

『資治通鑑』の著者であり、北宋の代表的な文人学者司馬光のこのような見解は、杜甫詩の注釈書集成として定評のある清・仇兆鰲の『杜詩詳註』にも引用され、これまで数多くの解説書・注釈書が踏襲してきた。固より芸術作品は他者が一律の鑑賞を強制すべきではなく、大学者も市井の凡人も各讀者の鑑賞の仕方は多様であつて良い。さりながら、作品の背景を考慮し、作者の思いに寄り添うという鑑賞の根本に立ち返つて、司馬光と「温公詩話」の説を読み返せば、筆者は司馬光説の大意は理解できるものの、以下の数点において腑に落ちない部分が残る。

（一）「花鳥は平時は嬉しむべき物なのに」という提示は、この場に必要で相応しい設定だろうか。確かに一般には「花や鳥は平常ならば美しく咲く花を見たり、楽しく囀る鳥の声を聞いたり」して嬉しむのが通例であろうが、安祿山乱の渦中、捕虜として生命の危険が迫るこの場面に於いて、花鳥にそのような呑気な設定をすることは、「平時ならば」という限定付きとはいへ、少々平和で安穩過ぎるように思う。筆者は「花鳥は平時は嬉しむべき物」という設定を「春望」詩の解釈に用いた途端、詩聖杜甫が忽ち市井の凡人に墮してしまふ氣がしてならない。一介の杜甫詩の愛読者が北宋の碩儒に苦言を申し立てることは蠅螂の斧でしかないが、その方向の解釈は本来の杜甫詩に表現される戦時下における花鳥像とは相容れないのではないだろうか。

（二）花と鳥の対句に対応する「之を見て泣き、之を聞きて悲しむ」の、特に後者の「鳥の声を聞く」という表現の淵源が不明である。「見・聞」という成語に引きずられたか、或いは他の理由からか。鳥は特性として「楽しく囀

る” 以外に、地上を徘徊するだけの人間と違い、“大空を自由に飛ぶ能力を持つ。” 特にこの場面は、本人は長安で捕虜となり、家族は北方に疎開している困難な情況下において、杜甫が鳥に寄せるイメージは、“鳴き声” よりも“自らが飛鳥のように大空を飛んで離散家族と再会する、又は飛ぶ鳥から離散した家族の何らかの情報を得る（所謂雁書）”要素が強いのではないだろうか。つまり「之を見て泣き、之を聞きて悲しむ」は、「咲く花を見て泣き、飛ぶ鳥を見て悲しむ」と解釈する方が、より杜甫の心情に肉薄するように筆者は思う。「憶弟二首其二」詩が「故園花自發 春日鳥還飛」と表現するのは有力な傍証である。対句としても“地に咲く花・天を翔る鳥”とした方が、静・動が対称してより相応しいと考える。これらの問題について、野口宗親論文「杜甫「春望」の驚心について」⁽¹⁾の以下の分析は正鵠を射たものとして筆者は同意する（傍線は引用者）。

この聯（引用者注…感時花濺淚 恨別鳥驚心）には從來「平素なら目を、ま、ま、ま、、春の花を見ても悲しくなり、ま、ま、ま、、耳に快いはずの鳥のさえずりを聞いても不安になる」という解釈が多いが、筆者（引用者注…野口）の感覚ではそういう言葉ま、ま、ま、を付け加えて訳すのは、それは後世の人間の鑑賞的態度から言えることであって、当時の杜甫のま、ま、ま、持や詩の主題と少し乖離しているように思う。

三 杜甫の故郷

杜甫の故郷は長安と洛陽の二箇所が挙げられる。長安南郊の杜陵と洛陽東郊の偃師である。杜陵は杜一族の族祖たる三国西晋の杜預（二三一―二八四）の本籍地である。杜預は三国時代の武將、学者として名を馳せ、『春秋経伝集解』の著作がある（他に杜預の曾孫杜遜が移住した湖北省襄陽も杜一族の重要な拠点である）。初唐の詩人杜審言（六四五―七〇八）の父杜芸が河南省鞏県の県令となり、一家は河南省鞏県に移住した。その子の杜閑は杜甫の父である。杜甫は七一年に鞏県で生まれた。「壯遊」（〇九五五）に回想される青少年時代を経て、三十歳、開元二十九年（七四一）に、洛陽東郊の偃師に新居陸渾莊を築き、新妻楊氏を迎える。後に先祖杜預、杜審言の墓もここに整備した。杜氏一族の拠点を偃師に定めたことになる。ところが、三十而立、婚姻という人生の重大事でありながら、杜甫の言及は甚だ

乏しい。或いは科擧や任官に失敗し、安祿山乱の禍中に生活苦に襲われた杜甫が窮余の一策として選んだ洛陽を脱出して中国西南方を流浪するという人生の履歴が、彼の『詩経』詩人としての自覚を覚醒させ、その結果、三十歳以前の六朝文学に倣った習作の全否定に直結し、杜甫が意図してそれらを破棄したことも考えられるが、証拠に乏しい。関連資料として僅かに開元二十九年（七四一、杜甫三十歳）の記年を有する「祭遠祖当陽君（杜預）文」¹⁵が伝わる。また『杜甫年譜』二十五歳項の「進鵬賦表」に「杜甫七、四十歳作品千余篇」として次の記述がある。¹⁶

杜甫少作甚多、皆不伝、所伝者僅寥寥。（杜甫の少き時の作は甚だ多きも皆伝はらず、伝はる所の者僅かに寥寥たり。）

以下、『杜甫年譜』の該当部分を引用して邦訳し、若干の補注を加える（原文は繁体字。引用は当用漢字を用いる）。

【公元七四一年（開元二十九年）杜甫三十歳】：由齊魯歸東都、築陸渾莊于偃師縣西北二十五里之首陽山下。其地有遠祖杜預与祖父杜審言的墳墓。県西二十里有戸郷亭。詩集中所言「河南陸渾莊」、「故廬在偃師」、「土塋莊」、「戸郷」、「土室」等、皆指此一处。是年寒食日、因築室落成、昭告遠祖、作《祭当陽君文》、表明築室首陽山下而居、是「不敢忘本、不敢違仁」。与夫人楊氏結婚、大約亦在是年。楊氏為司農少卿楊怡之女。夫婦間情好甚篤、尤其在安史乱後、共同流亡、艱苦備嘗、毎遇短期分離、輒有思家之作。但在結婚之始、能將新家安置於新築之陸渾莊居住、而其本人則時而居家、時而居東都。

【西暦七四一年（開元二十九年）、杜甫三十歳】：杜甫は齊魯（山東省）旅行から洛陽に帰り、陸渾莊を偃師縣の西北二十五里（十二・五km）にある首陽山の山麓に築いた。そこには杜甫の遠祖杜預や祖父杜審言の墓がある。偃師縣の西二十里（十km）には戸郷亭がある。杜甫詩集にいう「河南陸渾莊」（憶第二首其一）〇二四八、「故廬在偃師」（奉寄河南韋尹丈人）〇〇三三、「土塋（旧）莊」（一二〇五）、「戸郷」（〇〇三三）、「土室」（〇〇三三、〇三〇九）等はみなこの一箇所を指す。この年の寒食の日に新居が落成すると、杜甫は遠祖（杜預）に対して明白に告げて《当陽君（杜預）を祭る文》を作り、首陽山の麓に居室を築いて住むことを表明した。これが（祭文にいう）「本分を忘れず、仁に違わない」ことである。杜甫が楊氏と結婚したのは多分この年である。楊氏は司農少卿楊怡の女である。彼ら夫妻の愛情は深く篤く、とりわけ安祿山の乱後は共に各地を流浪し、共に辛苦を嘗め、二人が短期間別離するような時は、杜甫は家と思う詩を書いた。ただ結婚の始めには、新居を新築の陸渾莊に定めただろうから、本人（杜甫）は、時に陸渾莊に居り、時に洛陽に居るといふ生活をしたかも知れない。¹⁸

四 杜甫の親族

杜甫には四人の弟（穎・觀・豐・占）がいる。妹や従弟、妻や子供、更に各舍弟の子女等を加えると、杜甫一族は相当な人数になるが、当時や封建時代一般における家族の在り方から見れば、異常に多いものでもない。その各人の履歴等については、明・邵宝『杜詩集註』卷十七の宗族類に集中して纏めるほか、現代では黒川洋一『杜甫の研究』所収「杜甫家族考」、陳冠明・孫慄婷『杜甫親眷交游行年考』^②、下定雅弘・松原朗編『杜甫全詩訳注』四、「人物説明」、二宮俊博『津阪東陽《杜詩詳解》全釈』等に詳しい。

ここでは、異郷を流浪する杜甫が、望郷・帰郷の切実な思いと共に、別離もしくは消息不明の弟達（穎・觀・豐。末弟の占は杜甫に同行）へ「家長」としての篤い思いを綴った詩群について、主な作品を確認しておきたい。

① 杜穎について……杜穎は杜甫のすぐ下の弟である。開元二十九年（七四二）、山東臨邑県の主簿の任にあった。

「臨邑舍弟書至」詩（〇〇一四）があり、黄河が氾濫して堤防が決壊し、自分是对策事務に忙殺されている（ので陸渾狂の杜甫の婚姻祝宴に行けない）^③という書簡が式の前日に届く（「尺書前日至」）。天宝十五載（七五六）、待望の杜穎からの書簡を得た杜甫は、「得舍弟消息二首」（〇一四九）を詠む。詩中に「兩京三十口」とあるのは家長たる杜甫が故郷の長安（西京）と洛陽（東京）における杜一族を総数三十名と述べた貴重な記録である。この詩が「春望」詩の次に配列され、「憶幼子」（〇一五二）、「一百五日夜對月」（〇一五二）、「遣興」（〇一五三）と続く詩の配列からも、「春望」詩が単に春の長安の景・情を詠んだのではなく、戦乱によって家族が分離した悲哀を陸渾狂の歡樂の思い出と共に詠んだものであることを証するであろう（更に「春望」の直前「元日寄韋氏妹」（〇一四七）詩は南方の楚に嫁いだ妹を詠む）。「送舍弟穎赴齊州三首」（〇七八五～〇七八六）詩は、山東齊州に赴任する杜穎の送別詩である。中に「兄弟分離苦 形容老病催」「諸姑今海畔 兩弟亦山東」とある。また「九日五首」詩（一二〇九～一二二三）には「弟妹蕭条各何在」とあり、弟妹が分離した苦衷を述べる。

② 杜觀について……杜觀は安祿山の乱を河南許州に逃れた。杜觀は大暦二年（七六七）、杜甫を夔州に尋ねる。その後、藍田で新妻を娶り、江陵に移住した。杜甫が三峡の夔州を出て江陵に向かったのは実弟の杜觀に会う為でも

あった。「乾元中、寓居同谷県作歌七首」(〇三六四・〇三七二)詩は、乾元二年(七五九)、甘肅同谷での作。其三に「有弟有弟在遠方 三人各瘦何人強」とあり、穎・觀・豐の三弟を心配する(杜占は杜甫に同行)。更に「得舍弟觀書、」(二〇九三)詩には、既に江陵に到達し、暮春には夔州で再会予定という杜觀に対して、杜甫の高揚した気持を吐露する。「喜觀即到、」二首」(二〇九四・二〇九五)も同様である。また「遠懷舍弟穎・觀等」(二二九〇)「統得觀書、」(二二九二)等の詩において、杜甫は杜穎や杜觀の安否について心配し、特に江陵から当陽(湖北宜昌)に転居した杜觀との再会を何より楽しみにしていた。杜觀を詠んだ杜甫詩については、二宮俊博『津阪東陽《杜律詳解》全釈』下巻「舍弟觀」喜寄三首」詩に詳細な訳注がある。

③杜豐について……排行は五、詩中では杜五、第五弟等と呼ぶ。安祿山乱を「江左」に避難したが、その後消息不明になった。別に「第五弟豐、独在江左、」二首詩(七六六年作。〇九七九・〇九八〇)があり、其一に「十年朝夕淚 衣袖不曾乾」と述べ、杜豐との再会を待ち望む。「十年」は七五六年、安祿山軍が洛陽に闖入し、親族兄弟が分散後の期間をいう。「元日示宗武」詩(二二八六)に「不見江東弟 高歌淚數行」と詠み、音信不通の杜豐を偲ぶ。原注に「第五弟漂泊江左、近無消息」と。その後杜甫が杜豐と再会した記録は見出せない。

④杜占について……杜甫末弟の杜占は杜甫晩年の西北西南中国放浪の旅に同行した。「舍弟占、帰草堂檢校」詩(〇六九六。広徳元年(七六三)作)に「久客応吾道 相隨独爾来」と述べ、他の三弟が山東・河南・湖北にそれぞれ居住したのに比して、異郷を旅する自分に同行してくれる末弟の杜占に感謝している。詩題は「舍弟の杜占が成都の杜甫草堂に帰って草堂を点検する(のに、馴染みの杜占を遣わす)」意である。杜甫は翌年梓州から成都に赴くので、杜占の成都派遣は先遣、露払いの意味を持つ。杜甫詩中、杜占はこの一箇所のみ登場するが、記述の少なさは逆に杜甫親近の証であり、杜占はそれまでと同様、それから故郷洛陽に帰郷する長兄杜甫に随従したと考える。杜豐を含め、これら杜甫の実弟からの書簡が大切に保管され、その動向が今日に伝えられたのは、流浪の旅に同行した末弟杜占、また実子杜宗文・杜宗武の貢献が大きいであろう。

次に、杜甫の「月夜憶舍弟」詩(〇三〇四。乾元二年(七五九)、秦州(甘肅省天水)作に次のように述べる。

戍鼓斷人行 邊秋一鴈聲 戍鼓 人行斷え 辺秋 一雁の声

露從今夜白 月是故鄉明

露は今夜より白く 月は是れ故郷のごとく明らかなり

有弟皆分散 無家問死生

弟の皆分散する有り 家の死生を問ふ無し

寄書長不達 況乃未休兵

書を寄するも長く達せず 況んや乃ち未だ兵を休めざるをや

この詩では、甘肅秦州（天水）を流浪する杜甫が、乾元二年（七五九）白露（九月上旬）の満月の夜、異郷にあつて、同じく故郷洛陽を照らしているであろう月光を浴びつつ、故郷を偲び、安祿山乱で分散した弟達に思いを馳せている。仇兆鰲『杜詩詳註』巻一は、舍弟を河南許州の杜観と山東齊州の杜穎に比定する。いずれも安祿山乱の混乱から避難した。夜空に掛かる満月を見上げ、遠く離れた肉親に思いを馳せる構図は、中国詩史における詠月詩と同じである。杜甫のこの詩は、自らは遠く甘肅にあつて故郷河南の消息不明の弟達を家長たる兄として思いやつており、読者に直接訴える迫真性がある。

その他、杜甫が消息不明の弟妹を案じた詩例を該当部のみ掲げる（その他の詩例引用は紙幅の関係で省略する）。

- 干戈猶未定 弟妹各何之 拭淚霑襟血 梳頭滿面糸（遣興）〇四〇五
- 客子念故宅 三年門巷空（遣興三首其二）〇二三七
- 今日知消息 他鄉且旧居 熊兒幸無恙 驥子最憐渠（得家書）〇一七〇

以上を総合して考察すれば、杜甫は河南→甘肅→四川と放浪を続けつつ、常に安祿山乱で消息が絶えた一族弟妹達の安否を心底案じていた。七五七年、流浪の主因たる安祿山乱の渦中に長安で詠まれた「春望」の解釈においても、杜甫は鄜州に避難させた家族と別離しており、「故園花自發 春日鳥還飛」（憶弟二首 其二）詩と同様、これらの望郷という思念を十分に斟酌しつつ解釈すべきであると筆者は改めて考える。

五 杜甫の親族との別離と望郷

流浪中の杜甫が洛陽での故郷と親族との別離を回顧した「恨別」と題する五言律詩がある（上元元年（七六〇）成都作。〇四二〇）。杜甫はこの詩において、四川成都から二千km離れた故郷の洛陽や洛陽で別れた親族に思いを馳せる。

杜甫詩の「花」と「鳥」

洛城一別四千里 洛城にて一別して 四千里

胡騎長驅五六年 胡騎 長驅して 五六年

草木變衰行劍外 草木變衰するなか 劍外を行き

兵戈阻絶老江邊 兵戈に阻絶され 江辺に老ゆ

思家步月清宵立 家を思ひては 月に歩み 清宵に立ち

憶弟看雲白日眠 弟を憶ひては 雲を看つつ 白日に眠る (以下二句略)

冒頭の「洛城一別」の「洛城」は杜甫が「一別」する対象ではなく、「一別」した場所をいう。(更に「一別」の「一」も、少し、ちょっと、aではなく、一切、全て、allの意。)別れる行為は双方同じであるが、「洛城に、一別して」の「に」は対象を示す助詞ではなく、場所を示す助詞である。訓読では違いが明瞭でなく、「洛陽の町に別れを告げて」でも文法上は問題ないが、ここは「洛陽の町で親族一同に今生の別れを告げて」の意であろう。即ち多くの先行解釈と異なるが、別れを告げる対象は洛陽よりも、後述する多数の親族であると筆者は解する。そうであつてこそ、詩題の「恨別」の必死さ、深刻さが読者に伝わる。「恨別」の内容は、この時洛陽で別れた相手は、「恨」の用法から見て、その後安否不明になっている恐れがある。詩題からしても、「別れる」対象を洛陽とした場合の感傷気分は「恨」にうまく接合せず、対象が「弟・家郷」であつてこそ、杜甫の生死を掛けた放浪の旅の深刻さが直に伝わる。「家」は広く家郷、故郷の意。洛陽の陸渾莊を含む。「立」は呆然と立ち尽くす意である。上掲の第五六句について、贅言を補いつつ以下に拙訳する。

(成都に着いた私は) 故郷洛陽を思つて月光のもとに散歩したり、清かな夜に呆然と立ち尽くしたり、消息不明の三人の弟達と陸渾莊で楽しく過ごした頃の事を思い出しては、空に浮かぶ(洛陽の方へ流れ行く)雲を見つめたり、(昨夜眠れなかったので) 日中に眠り込んだりしている。

このような杜甫の狂おしい望郷の念は、更に五年後の大暦元年(七六六。杜甫五十五歳) 四川夔州で詠んだ「秋興八首其一」(〇九八五)からも見いだせる。

叢菊兩開他日淚

叢菊 兩たび開く 他日の涙

孤舟一繫故園心 孤舟 一に繋ぐ 故園の心

この詩は、杜甫が異郷で咲く花を見て涙した花を「叢菊」であると述べる。この設定は「春望」の「感時花濺淚」と同様、杜甫が異郷の花を見て望郷の念に駆られて流した涙であろう。「一繫」は、ズーっと、一筋に繋ぐ意。成都→長安の帰路は三峽→湖北→漢陽→襄陽→藍田→洛陽を辿り、襄陽に至る前半は水路である。故に帰路の前半は一艘の小舟で帰ることができる。杜甫が四川夔州において、九月九日の重陽の節句に、群がり咲く菊花を見て涙するのは、昨秋の雲安に続いて二度目である。「他日」においては「春望」詩に「感時花濺淚」と詠んだ如く、花を見て流涙したこともある（「他日」は往時。直接には夔州で菊花に涙した二年前を指すと思われるが、遠く八五七年晩春、長安で見た花に涙した記憶に繋がるであろう）。船着場には杜甫が帰郷の為に購入した一艘の小舟がずっと繋がれたまま、それは故郷に帰りたいという杜甫の悲願を一心に繋ぎ止めている。更に、西南放浪中の杜甫が中原（洛陽）に向かって、安祿山乱の為に故郷の弟妹と別離して再会もかなわない状況を悲しんだことについて、津阪東陽『杜律詳解』下巻、「詠懷古跡」其一の詳解文に次のように述べる。

蓋悵望中原而悲家鄉弟妹睽離于禍亂、不得相見也。

（蓋し中原を悵望して、家郷弟妹の禍乱に睽離し、相見るを得ざるを悲しむ也。）

これらの資料は、故郷の洛陽を思う杜甫の思念が如何に強烈であったかを物語る。そして、その故郷の青少年期の歓楽を象徴するものが、曾て洛陽陸渾荘の春に咲き、空に舞う「花・鳥」に収斂すると筆者は解したい。

六 まとめ — 「憶弟二首其二」詩を踏まえて「春望」詩を再読する —

清・仇兆鰲『杜詩詳註』卷六「憶弟二首其二」詩は、「故園花自発 春日鳥還飛」句に次の詩後注を付する。

花發鳥飛、即濺淚傷心意。

（「憶弟二首其二」詩の）（「花発」鳥飛ぶ）は、即ち「春望」詩の「涙を濺ぎ心を傷める」の意なり。）

仇兆鰲の注は両詩の密接な関係を指摘しており、筆者には心強い後押しである（「傷心」を、「春望」詩は「驚心」に作

杜甫詩の「花」と「鳥」

る。また仇兆鰲が「春望」詩の詩後に引く「温公詩話」には「聞之而悲」とあるのを、「憶第二首其二」では原詩「鳥還飛」に沿って上記のように「鳥飛」と記しており、「花咲き鳥鳴く」（鳥鳴＝聞之ではなく、「花発き鳥飛ぶ」と書写している事実も見逃せない。というのは、大空を自由に飛翔する鳥は、それを地上から見上げる当時の異郷をさすらう旅人には間違ひなく故郷へ（から）の何らかの便りを連想するであろう。その一例として、杜甫の名詩「絶句二首其二」詩を挙げる（作詩年は七六四年、場所は成都。この詩も花・鳥が対句である）。

江碧鳥逾白 山青花欲然 今春看又過 何日是歸年

（江碧にして鳥逾いよ白く 山青くして花然えんと欲す 今春看みす又過ぐ 何れの日かは是れ歸年ならん）

ここに点景として描かれる「白い鳥」も（今咲こうとする花も）単なる自然の風景ではなく、杜甫に帰郷を促す特別の風物であることに注目したい。更に贅言すれば、上掲の短い「絶句二首其二」詩において、「花」「鳥」「帰（郷）年」が揃って詠み込まれることは、前述したように、その帰郷先として、杜甫の脳裏には若年の頃に杜氏一族が楽しく集った洛陽の陸渾荘の記憶が刻み込まれていたと筆者には思えるのである。

以上、小稿が提起した「春望」の解釈を巡る素朴な疑問と、筆者なりに模索した試みの解答を三点にまとめる。

（一）従来、先人の解釈は動もすると「春望」詩を単一の詩篇として解釈する傾向があったと見受けるが、詩中に描かれた花や鳥、親族との別離や望郷の念は杜甫詩の至る処に描かれる重要な普遍素材であり、解釈に際しては「春望」詩以外の他の関連詩も顧慮すべきである。

（二）中でも「花・鳥」は杜甫三十歳時に洛陽陸渾荘で開かれた杜甫と楊氏の婚姻を強く反映していると思われる。杜甫はその後、流浪先で花や鳥を見かけると、故郷の陸渾荘での歓楽を想起して屢々落涙する。杜甫が「春望」を詠んだ直接の契機は安祿山の乱渦中の長安で見た花鳥であったとしても、「春望」詩の解釈には、杜甫が洛陽陸渾荘で享受した一族の団欒を彩った花鳥の記憶も慎重に斟酌すべきである。

（三）北宋の大歴史家司馬光「温公詩話」の「花や鳥は平時ならば歓楽の対象であるが、戦時の今は」という解釈は、杜甫の心情に沿うとは言い難い一般鑑賞の域を越えず、杜甫詩の解釈としては承服し難い。

最後に、以上述べた「春望」詩に関する解釈をやや過剰に（一）内に補いつつ、筆者なりの試案を示したい。

春望

國破山河在 城春草木深

(安祿山乱渦中の) 長安晩春の悵望
國破れて山河在り 城春にして草木深し

(安祿山乱で国家は破滅したが、自然の山河は変わりなく厳然と存在し、晩春の長安は草木が深々と生い茂っている。)

感時花濺淚 恨別鳥驚心

時に感じては花にも涙を^{そそ}濺ぎ 別れを恨んでは鳥にも心を驚かす

(私は戦時という非常事態に感慨を覚え、長安に咲く花を見て(曾て皆と楽しんだ洛陽陸渾莊の花を思い出して)涙を流し、消息不明の弟妹達との離別を恨めしく思つては、(陸渾莊のように空を自由に飛ぶ)長安の鳥を見ても、(何の知らせかと)心が騒ぐ。)

烽火連三月 家書抵萬金

烽火 三月に連なり 家書 万金に^あ抵たる

(戦火は三カ月も続き、(鄭州に疎開中の)妻からの手紙は金万両に相当するほど貴い。)

白頭搔更短 渾欲不勝簪

白頭 搔けば更に短く 渾^すべて簪に勝^たへざらんと欲す

(我が白髪を指で搔くと抜け落ちてうすくなり、(これでは科擧に合格して役人になつたとしても簪も挿せないだろう。))

注

(1) 松浦友久編、大修館書店、一九八七年。執筆は宇野直人。

(2) 副題は「——続々・杜甫詩話——」。研文出版、二〇一七年。

(3) 四桁番号は下定雅弘・松原朗編『杜甫全詩訳注』(講談社学術文庫、二〇一六年)による。本文と重複するが贅言を重ねる。杜甫詩に造詣の深い許多の専門家や大家の解釈が多数既刊公開されており、杜甫詩が如何に多くの読者に愛読されてきたかがよく分かる。名篇は人類共通の文化遺産である。筆者も杜甫詩に惹かれる読者の一人であるが、実は「感時花濺淚 恨別鳥驚心」の解釈について、どの先行解釈を参照してもストンと納得できなかった。ところが近

杜甫詩の「花」と「鳥」

年、ある事情から『杜甫全詩訳注』や『津阪東陽《杜律詳解》全釈』（二宮俊博遺著、二宮印刷工房、二〇二三年十一月）刊行のお手伝いをさせていただく機会があり、幸運にも 四川三峡を流浪する晩年の杜甫が詠んだ詩を集中して精読することができた。その際、杜甫詩に「花」「鳥」「涙」等の詩語が重出し、しかもそれらは一様に、故郷の洛陽・長安に別れを告げて不帰の旅に出た杜甫が、流浪の途次に、忘れ得ぬ洛陽・長安や別離したままの親族を回顧する望郷の詩中において、以下のように象徴的に重ねて用いられていることが判明した。

①故園花自発 春日鳥還飛（憶弟二首其二、七五九年。原注「時に歸りて河南陸渾莊に在り」。〇二四九）

②江碧鳥逾白 山青花欲然 今春看又過 何年是歸年（絕句二首其二、七六四年、成都。〇七五一）

③叢菊兩開他日淚 孤舟一繫故園心（秋興八首其一、七六六年、夔州。〇九八五）

具体説明は本文中に述べるが、この三詩には「花」「鳥」「歸」「故園」「故郷」「涙」の語が重出する。これは「春望」と同じ構図ではないか。ならば、これら三詩（更に其の他の杜甫詩）の分析から、溯って「春望」詩の世界を再考することが可能ではないだろうか。

以上、筆者が杜甫「春望」詩の再検討を思い立った経緯である。先行する関連論著の調査や実証が不十分な拙稿はやむなく想像に頼った部分も多いが、一私考として寛容していただければ幸甚である。

（４）『論語』為政篇。

（５）『元稹集』卷五十六。興味深いのが、約五十年後の白居易の夫人も名門弘農華陰の楊氏一族出身である。杜甫・白居易の事情は異なるが、当時の新興知識人が名門令嬢との婚姻によって出世の道を進もうとした痕跡を看取れる。宋・樂史「楊太真外伝」が楊貴妃を「弘農華陰の人」とするのは当時の附会伝説である。

（６）「語不驚人死不休」（語人を驚かさずんば死すとも休まず）。杜甫「江上值水如海勢」（〇四六一）の語。

（７）『資治通鑑』卷二二五、天寶六載（七四七）条によると、玄宗是天寶六載、一芸に通じる者の選拔を李林甫に命じたが、選拔された秀才によって我が悪行が暴露弾劾されるのを恐れた李林甫は「野に遺賢無し」と上奏し、あろうことか受験生全員を落第とした。この時の受験生の一人が不幸にも杜甫であった。

（８）『論語』為政篇。

(9) 『杜甫全詩詠注一』人物説明。

(10) 洛陽の東約三十五kmに偃師があり、偃師の北北東約二十kmに鞏県がある。嵩山は洛陽の東南東約五十五km一帯に聳える。一方、陸渾の地名は洛陽の西南西約六十km、伊水沿いにも陸渾県、陸渾山（一名方山）がある。

陸渾荘の場所について、陳貽煥『杜甫評伝』（北京大学出版社、二〇〇三年。上巻五十五頁）は「陸渾荘を洛陽の東の偃師県の西北十二、五kmにある首陽山の麓に築いた」とする。『杜甫大辞典』もほぼ同じ。

(11) 「温公」は、温国公の爵位を贈られた司馬光をいう。「統詩話」冒頭に「敢えて続けて之を書す」と。清・紀昀『四庫全書総目』巻一九五「統詩話」に、「宋・司馬光、欧陽脩の『六一詩話』に続けて作る」と。

(12) 文会堂書店、明治四十五年。後に平凡社、東洋文庫、一九九三年。

(13) 前注（11）に同じ。司馬光「統詩話」（温公詩話）は欧陽脩「六一詩話」の続作の意。

(14) 『^{国語}國文研究と教育』三十二号、熊本大学教育学部国文学会、一九九五年十二月。

(15) 仇兆鰲『杜詩詳註』巻二十五所収。

(16) 四川省文史研究館編、四川人民出版社、一九五八年。なお陳貽煥『杜甫評伝』（上海古籍出版社、一九八二年）八十二頁の記述は、『杜甫年譜』の記述を踏襲する。

(17) 佐藤浩一「杜甫における若き日の詩——散逸、それとも破棄」（早稲田大学中国古籍文化研究所『中国古籍文化研究稲畑耕一郎教授退休記念論集』下、東方書店、二〇一八年）は、この問題を分析し、「流通の過程で散逸した」とする。原作者が若年の習作詩文の清書を放棄し、後世への伝承を断てば、それら詩文は自ら散逸の道を辿ることになる。

(18) 杜甫が妻への愛情を示した詩に「月夜」（〇一四一）、「得家書」（〇一七〇）、「羌村三首其一」（〇一八五）等がある。陳冠明等『杜甫親眷交游行年考』（上海古籍出版社、二〇〇六年）十六頁によると、杜甫の妻への呼称が大暦二年（七六七）を境に、「老妻」から「山妻」に変更することから、楊氏はその頃に夔州で没したとする。「山妻」は杜甫が四川夔州で娶ったとする現地後妻の呼称。二宮俊博遺著『津阪東陽《杜律詳解》全釈』（二宮印刷工房、二〇二三年十一月）上巻二八〇頁に杜甫の妻楊氏に関する論著を紹介する。なお、引用文中に「寒食の日に新居が完成」とあるのは、寒食節に続く清明節（旧暦四月五日頃）に先祖の墓参をする中国古来の風習による。

(19) 創文社、一九七七年。

(20) 上海古籍出版社、二〇〇六年。

(21) 講談社学術文庫、二〇一六年。

(22) 二宮印刷工房、二〇二三年。上巻、二三八頁〇二四詩、注(二〇)、二八〇頁〇三一詩、注(五) 参照。

(23) 二宮印刷工房、二〇二三年。

(24) 「家」は住む家でなく、人を指している一種の敬語。現代語の「人家」「他家」の用法に近い。

(25) 松浦友久「「閨怨詩」と「長恨歌」」(『万葉集』という名の双関語)所収。大修館書店、一九九五年)。原載は『月刊しにか』一九九二年、九月・十月号。

(付記) 筆者は二十七年前、次に挙げる同趣旨の拙稿において、未熟ながら問題提起した。今回改めて再提出する。

「杜甫『春望』詩における花と鳥」(『新しい漢文教育』二十二、全国漢文教育学会、一九九六年)。

後に『中国文学論纂』(花書院、二〇二一年)に再録。

また、校正中の二〇二三年十一月十七日には中山大学中文系(中国広州)において、

『感時花濺泪 恨別鳥惊心』——杜甫《春望》景情試探——

と題して講演する機会を与えられた。ご招請いただいた彭玉平系主任、及び簡潔な中文演稿の作成に尽力された黄冬柏共立大学教授、全ての関係者に感謝申し上げます。